

第 78 回全国連合小学校長会研究協議会北海道大会

第 69 回北海道小学校長会教育研究札幌大会

原稿執筆要綱

全国連合小学校長会研究協議会北海道大会
実行委員会事務局

事務所 北海道小学校長会事務所

住 所 北海道札幌市中央区北 5 条西 6 丁目

第二北海道通信ビル 306

E-mail h. s. k-32zenkoku@dousho. jp

TEL 011-218-9850

FAX 011-218-9851

9 月 30 日 (水)	10 月 1 日 (木)	10 月 2 日 (金)
9:00 常任理事会・理事研修会受付	8:00 受 付	8:00 受 付
9:30 全連小 常任理事会	9:15 開会式	9:15 全体会
11:00 道小 理事研修会	10:15 文部科学省講話	9:45 講 演
12:00 大会運営委員会	11:05 全体会	11:40 閉会式
12:00 昼 食	11:45 大会宣言文 審議委員会	12:00 教育視察研修
13:00 全連小理事会 受付	13:00 昼食・移動	
13:45 分科会運営者研受付	13:45 分科会	
13:45 全連小 理事会		
16:00 分科会運営者研修会 全体会		
16:00 分科会ごとの 打合せ会		
17:00 開閉会式・全体会 リハーサル	16:45 分科会	
18:00 交歓会		
20:00		

I 研究・提案・大会要録原稿について

1 原稿執筆にあたって

(1) 研究のまとめ方

① 大会主題を踏まえて研究を進める。

「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」

② 副主題設定の理由を踏まえて研究をまとめる。

「ふるさとに誇りと愛着をもち ともに未来社会の創造に挑戦する子どもを育てる 学校経営の推進」

③ 全連小北海道大会の「分科会の趣旨及び視点」に沿って執筆する。

※ ①～③は、北海道小学校長会ホームページ内「全連小北海道大会特設サイト」において、「大会大綱（大会主題・副主題、分科会関係抜粋版）」「北海道大会研究要綱」等からご確認できます。

※ 原稿様式は、同サイト内「北海道大会要録執筆例（書式データ）」を使用してください。

(2) 発表内容についての留意事項

① 校長のリーダーシップ

「視点」にある「校長の果たすべき役割と指導性」を究明することに力点を置いた提言とし、校長としての在り方や職責を明らかにする。

そのために、「Ⅰ 趣旨」「Ⅱ 研究の概要」「Ⅲ まとめ」の各項目の中で、校長の果たすべき役割と指導性について言及する。

② 協働性

個人の研究発表ではなく、各地区の複数校の実践例を基に検証を進めるなど、研究基盤となる各地区校長会一人一人の力を結集した提言や各地区校長会において検証された提言とする。

なお、参考として第 70 回全連小研究協議会東京大会にて北海道小学校長会が研究発表した執筆例を添付するのでお読みいただきたい（別添 1）。

(3) その他

北海道小学校長会では、大会前に 4 回の分科会運営者研修会を開催して分科会の充実を図っている。については、研究発表者の皆様には、第 2 回（WEB）と第 4 回の分科会運営者研修会（会同）への出席をお願いしたい（別添 2）。

2 分科会の発表者一覧

- (1) 研究領域・分科会 5 研究領域・13 分科会とする。
 (2) 発表都道府県

研究領域		分科会		研究発表割当		
				視点 1 (全国)		視点 2 (北海道)
I	学校経営	1	経営ビジョン	近畿	京都府	上川
		2	組織・運営	中国	鳥取県	石狩
		3	評価・改善	東北	宮城県	オホーツク
II	教育課程	4	知性・創造性	九州	佐賀県	空知
		5	豊かな人間性	関東甲信越	長野県	留萌
		6	健やかな体	中国	島根県	胆振
III	指導・育成	7	研究・研修	東海北陸	福井県	十勝
		8	リーダー育成	近畿	滋賀県	釧路市
IV	危機管理	9	学校安全	東北	宮城県	後志
		10	危機対応	四国	徳島県	函館
V	教育課題	11	社会形成能力	九州	鹿児島県	帯広
		12	自立と共生	東海北陸	福井県	釧路
		13	社会との連携・協働	関東甲信越	新潟県	旭川

3 大会要録用発表原稿の提出

- (1) 提出依頼 令和8年2月16日(月)
 (2) 提出期限 令和8年5月15日(金)
 (3) 提出先 全連小北海道大会実行委員会事務局
 〒060-0005 札幌市中央区北5条西6丁目 第二北海道通信ビル306
 E-mail h.s.k-32zenoku@dousho.jp
 TEL 011-218-9850 FAX 011-218-9851
 (4) 提出は、各都道府県事務局を通して行う。
 (5) 発表原稿の仕様 II-2を参照

4 原稿の内容確認と校正

- (1) 実行委員会では、「研究課題」及び「視点」と原稿内容の関連等について確認する。
 また、原稿書式や表記、誤字脱字について校正する。
 (2) 必要に応じて発表者に連絡を取り、内容の確認や訂正をお願いすることがある。

Ⅱ 大会要録原稿のまとめ方

1 発表原稿のまとめ方について

(1) タイトル等について

① 研究発表タイトルについて

ア 「分科会の趣旨」「視点」を踏まえて設定する。

イ 「視点」により具体性をもたせたタイトルとする。

② 研究発表サブタイトルについて 研究発表タイトルが広義の場合や、研究の意図・方向性を示す場合には、サブタイトルを設定し、内容を具体化する。

(2) 本文について

① 記述形式(項目)は「Ⅰ 趣旨」「Ⅱ 研究の概要」「Ⅲ まとめ」とする。

② 「Ⅰ 趣旨」について

ア タイトル設定に至った背景、経過、地域性等を考慮し、できる限り端的に記述する。

イ 「大会主題」「大会副主題」「副主題設定の理由」「分科会の趣旨」「視点」とできる限り関連を図る。

③ 「Ⅱ 研究の概要」について

ア 研究内容は、「分科会の趣旨」を踏まえ、「視点」に沿ってまとめる。

イ 課題解明に向けて、校長の果たすべき役割や指導性が具体的に分かるように記述する。この部分は研究発表の中心となる部分であり、執筆量を十分に割くようにする。

④ 「Ⅲ まとめ」について

研究で明らかになったことや成果と課題を分かりやすく簡潔にまとめる。

2 発表原稿の仕様について ※「大会要録執筆例」(P5～P6) 参照

(1) 字数・枚数・提出等について

① 1 ページの字数

ア タイトルのページ…… 27 字×39 行×2 段 (2106 字) MS 明朝 9 ポイント
(タイトルの枠に 13 行使用する)

イ タイトルなしのページ…27 字×52 行×2 段 (2808 字) MS 明朝 9 ポイント

ウ 字数が指定を超えたり、指定より少なかったりした場合は、編集段階で行間調整をする。

② 原稿の提出様式

ア 執筆原稿はコンピュータ使用とする。

イ 使用ソフトは「ワード」とする。

ウ 都道府県名を明記して、電子メールに添付して提出する。ただし、データ容量が重くメールで提出できない場合は、複数に分けて送信したり、CD-R にて提出したりする。

③ ページ数 A4 版 4 枚とする。(全連小大会要録原稿は 4 ページとなる)

(2) 執筆の仕方について

① 1 ページ目 上部 13 行に次のことを記載する。(1 行と 13 行、1 字と 57 字は罫線)

ア 分科会名 「研究課題」 「視点」 * 研究発表タイトル サブタイトル (あれば)

イ 都道府県名 所属校名 名前

(学校名、個人名で作字が必要な場合、その文字が明記された資料を添付すること。印刷物やコピーでも可)

② 本文の開始 14 行目から記載する。ただし、「I 趣旨」のタイトルに 3 行分割く。

③ 文字・文体

ア フォントは MS 明朝及び MS ゴシックのみとする。

イ 句読点は「。」「、」とする。(コンマ「,」ではない。)

ウ タイトルの最後には句点「。」を打たない。

エ 常体(〇〇である。〇〇と考える。)を用いる。

④ 図表・写真

ア 文章中の記述を補完するために必要な図表・写真は入れてもよい。

イ 写真は原稿に貼り付けたもの以外に電子データも提出する。(印刷はカラーとなる。)

ウ 図表は原稿に貼り付けたもの以外に電子データも提出する。(印刷はカラーとなる。)

エ 棒グラフ等を使用する場合は、明示するため網掛けの種類を変えることがある。

オ 表などの枠となる罫線は行間を使用する。縦の罫線は 1 字分とする。

(3) 番号・記号の表記について

次の表記とする。

I	・・・全角ローマ数字	※文字の書き出しは 1 文字あける。
1	・・・全角算用数字	※文字の書き出しは 1 文字あける。
(1)	・・・全角括弧付き全角算用数字	※書き出しは 1 文字 <u>あけない。</u>
①	・・・全角丸囲み算用数字	※文字の書き出しは 1 文字あける。
ア	・・・全角カタカナ	※文字の書き出しは 1 文字あける。

※ 上記の例は、位置関係が分かりやすいように線を引いてある。

※ 基本的に「原稿執筆要綱」の通りに執筆する。(P5、P6 の「大会要録執筆例」参照)

(4) 数字について

基本的に全角とする。ただし、2 桁以上の数字、小数点のある数字については半角とする。

(5) 表記について

基本的に「全連小機関誌小学校時報 全連小広報部用字用語例

(平成 22 年 12 月 17 日 常任委員会修正)」に従う。(P7、P8 参照)

[illegible]

研究発表 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○（長い場合は2行に）

(副題が必要な場合) ~○○○○○○○○○○○○○○○○○○~

〇〇県■〇〇町立〇〇小学校■●○■○■○■○■

(※枠内の文字は、印刷時に MS ゴシック体 11 ポイントに体裁を整えます。)

I ■ 趣旨

※3行使用

1 ■ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ※MSゴシック体9 P

■○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○。 ※本文はMS明朝体9P

(1) ○○○○○○○○○○

■①■指導の具体について ※小見出しは「。」なし

■ ■ \nearrow ■ ○ ○ ○ ○ ○

■ ■ ■ ■ ○

■ ■ ■ ○ ○ ○ ○

< 1 行あける >

2 ■ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

30

31

32

33

34

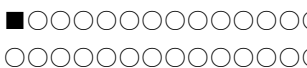
35

36

37

38

39



※図・写真番号

図・写真名を
記入する。

Diagram illustrating the first 100 circles (10 rows of 10 circles each). The first circle is filled black. The circles are numbered 1 through 100 in a row-by-row sequence. A bracket above the first row indicates the first 10 circles. A bracket to the right of the first row indicates the first 10 rows. A bracket below the first row indicates the first 100 circles.

II ■研究の概要

※3行使用

1 ■ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ≧ ※MS ゴシック体 9 P

※図・写真番号

図・写真名を

記入する。

大会要録執筆例 ※ ■は、空き文字

・ ・ ・ ・ 5 ・ ・ ・ ・ 10 ・ ・ ・ ・ 15 ・ ・ ・ ・ 20 ・ ・ ・ ・ 25 ・ ・					
・					
・					
・					
5	・	・	・	・	・
・					
・					
・					
・					
10	・	・	・	・	・
・					
・					
・					
15	・	・	・	・	・
・					
・					
・					
・					
20	・	・	・	・	・
・					
・					
・					
・					
25	・	・	・	・	・
・					
・					
・					
・					
30	・	・	・	・	・
・					
・					
・					
・					
35	・	・	・	・	・
・					
・					
・					
・					
40	・	・	・	・	・
・					
・					
・					
・					
45	・	・	・	・	・
・					
・					
・					
・					
50	・	・	・	・	・
・					
・					

2 ページ目以降の様式

・ ・ ・ ・ 5 ・ ・ ・ ・ 10 ・ ・ ・ ・ 15 ・ ・ ・ ・ 20 ・ ・ ・ ・ 25 ・ ・					
・					
・					
・					
5	・	・	・	・	・
・					
・					
・					
・					
10	・	・	・	・	・
・					
・					
・					
15	・	・	・	・	・
・					
・					
・					
・					
20	・	・	・	・	・
・					
・					
・					
・					
25	・	・	・	・	・
・					
・					
・					
・					
30	・	・	・	・	・
・					
・					
・					
・					
35	・	・	・	・	・
・					
・					
・					
・					
40	・	・	・	・	・
・					
・					
・					
・					
45	・	・	・	・	・
・					
・					
・					
・					
50	・	・	・	・	・
・					
・					

ア行		カ行	
あいさつ	→ 挨拶	ことし、こんねん	→ 今年
暖かい心	温かい心	ことば	言葉
あたりまえ	当たり前	子供	子ども
あらためて	改めて	子供たち	子どもたち
あらたに	新たに	このごろ	この頃
ありかた	在り方	コンピューター	コンピュータ
有難う	ありがとう		
或は	あるいは	サ行	
活かす、いかす	生かす	さいわい	幸い
如何なる	いかなる	さまざまに	様々に
いきいき	生き生き	更に、…（接続詞）	さらに、…
いきがい	生き甲斐	さらに…（副詞）	更に
何れ	いずれ	しあわせ、仕合わせ	幸せ
懐く、いただく	抱く	然し	しかし
いたす	致す	しかた	仕方
位置づく	位置付く	しくみ	仕組み
いっこうに	一向に	しだい	次第
いっさい	一切	従って、…（接続詞）	したがって、…
いっしょに	一緒に	…にしたがう	…に従う
いっせい	一斉	指導要録	児童指導要録（略さない）
いっそう	一層	充分、じゅうぶん	十分
うしろ	後ろ	じょうず	上手
おおぜい	大勢	じょうぶ	丈夫
おこす	起こす	指導要領	学習指導要領（略さない）
おこなう	行う	ずいぶん	随分
恐らく	おそらく	すぎる	過ぎる
おとな	大人	直に	すぐに
おのあの	各々	すぐれる、勝れる	優れる
自ら	おのずから	すすめる	進める
おもしろい	面白い	すでに	既に
および…（接続詞）	及び	即ち、則ち	すなわち
		すべて、総て	全て
カ行		折角	せっかく
却って	かえって	ぜひ	是非
かかわる	関わる	雑巾	ぞうきん
かたづける	片付ける	そうとう	相当
且つ	かつ…		
かてい、過程、課程	指導過程、教育課程	タ行	
かならず	必ず	たいせつ	大切
がまん	我慢	だいたい	大体
きたえる	鍛える	大へん、たいへん	大変
きづく	気付く	たがいに	互いに
きびしい	厳しい	遅しい	たくましい
くふう	工夫	たしかに	確かに
位、くらい	ぐらい	但し	ただし
くりかえす	繰り返す	ただちに	直ちに
こころ懸け	心掛け…	たてわり	縦割
毎	（ことある）ごと	たとえば	例えば
こたえる	応える	近ごろ	近頃
ことがら	事柄	丁度	ちょうど

タ行		マ行	
ついで	→ 次いで	見きわめる	→ 見極める
つぎに	次に	見事、美事	みごと
つくる（新しい時代を）	創る	みづか	身近
つごう	都合	みずから	自ら
つねに	常に	身につく	身に付く
てあて	手当	子供を見る、見取る	子どもをみる、みとる
適確	的確	むずかしい	難しい
出来る	できる	めあて	目当て
てだて	手だて	めざす	目指す
手元、手許	手もと	めんどろ	面倒
同志、同士	教師同士	もくと	目途
…の通り	…のとおり	勿論	もちろん
…をとおして	…を通して	もより	最寄り
とくに	特に	ヤ行	
友だち、ともだち	友達	やくわり	役割
捉える、把える	…をとらえる	やさしい	易しい
とりあつかい	取り扱い	ようす	様子
とりくむ（動詞扱い）	取り組む	…の様だ	…のようだ
取組み、取り組み（名詞扱い）	取組	余程	よほど
ナ行		ラ行	
尚、猶	なお	（彼）等、（何）等	（彼）ら
中でも	なかでも	りっぱ	立派
なかま	仲間	連係、連繫	連携
何故	なぜ	ワ行	
…等	…など	我国、わがくに（校）	我が国、我が校
なにぶん	何分	解かる、判る	分かる
ならびに	並びに	わずか	僅か
成程	なるほど	わたくし、わたし	私
になう、荷なう	担う	亙って、亘って	わたって
粘り強い	ねばり強い	わりあい	割合
則って	のっとって		
ハ行			
はあく	把握	その他の表記	
…をはかる	…を図る	三ヶ年、三カ年、三箇年	三か年
はぐくむ	育む	当校は…、我が校は…	本校は…
はたす	果たす	学校区、校下	校区、学区
ひとりひとり	一人一人	児童・生徒	児童生徒
ひらく（新しい時代を）	拓く	基礎基本	基礎・基本
父母	保護者（に統一）	基礎的、基本的	基礎的・基本的
触れ合い	ふれあい	思考力、判断力	思考力・判断力
僻地、辺地	へき地		
ほか、外	他		
殆ど	ほとんど		
ほんとう	本当		
マ行		欧文横文字の使い方	
先ず、まづ	まず	Plan, Do, Check, Action	P・D・C・A（計画・実施・評価・改善）
益々、増々	ますます		
まちがう	間違う		
まったく	全く		
見出す	見いだす		

第7分科会 「研究課題」 学校の教育力を向上させる研究・研修の推進
「視点①」 学び続ける教職員を目指し、資質・能力の向上を図る研究・研修体制の充実

**研究発表 関係機関との連携、キャリアステージに応じた研究・研修体制の構築による
教職員の資質・能力の向上を目指す校長のリーダーシップ**

北海道 留萌市立港北小学校 村 元 隆 一

I 趣旨

「令和の日本型学校教育」の構築を目指した取組の推進等、各学校における教育課題の解決のため、私たち校長は学校の組織力を高め、教職員一人一人が学校経営に参加していこうとする当事者意識を醸成させながら、「学び続けていく教職員」の育成を図る必要がある。

そのために、校長は「北海道における教員育成指標」で示されている指標を共通の観点とし、教職員一人一人の特性や適性を見極め、計画的・系統的に研究・研修を推進し、キャリアステージに応じて求められる資質・能力を向上させることが重要である。

本研究では、校長として、学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに捉え、探究心をもち自律的かつ継続的に学び続ける教職員の資質・能力の向上に確かな展望をもち、組織の要となるミドルリーダー人材の育成、さらに、地域や学校規模、それぞれの教職員のキャリアステージを意識した育成を図るための研究・研修体制について留萌管内各校の実践をもとに考察し、校長のリーダーシップの在り方を明らかにする。

II 研究の概要

1 研究のねらい

教育活動の質的向上のために、校長は、教職員一人一人の特性や力量を見極め、個に応じた課題とその具体的な解決への展望をもたせながら、「学校力」を高める研究・研修を推進していく必要がある。

具体的には、計画的・系統的に、若年層の段階からそれぞれのキャリアステージに応じた力を身に付けさせるとともに、リーダーとして多くの経験を積ませ、「チームとしての学校」への経営参画意識を高めていくことが必要である。

〈留萌管内8市町村の学校規模〉

小学校	15校	全学年1学級 5校 複式校7校
中学校	9校	全学年1学級 4校 複式校1校
小中併置校	2校	離島 複式校2校
市町村小学校・中学校各1校の市町村 ～3町村		

近年、児童生徒数の減少に伴い、留萌管内の8割の学校が1学年1学級の編成となるほか、小中1校ずつの体制となる町

村も増えるなど、学校数や教職員数の減少が顕著である。このことが、各学校におけるミドルリーダーの育成、校内研修の活性化といった研究・研修体制の確立を図る上で大きな課題となっている。

そこで、留萌管内小中学校長会（以下、管内校長会）では、これまで培ってきたよき教育風土を継続・維持し、安定的な研究・研修体制を構築するため、各学校や関係機関での取組を整理し、課題解決の方策を探ってきた。その中で再確認された本管内の「強み」は、次の4点である。

①各校長間や関係機関との連携力 ②複式校におけるICTを活用した授業交流、教職員研修の充実 ③ミドルリーダーの研修意欲の高さ ④スピード感のある取組

こうした強みを基盤とし、各学校の教育力向上を目指す研究・研修体制を確立し、「令和の日本型学校教育」を担う学び続ける教職員の育成に、より組織的に取り組む必要がある。

2 研究の内容

(1) 研究の視点

○関係機関との連携、キャリアステージに応じた研究・研修体制の構築による教職員の資質・能力の向上を目指す校長のリーダーシップ

【実践例1】関係機関と連携した研修による教職員の資質・能力の向上

①管内研究所と連携した研修による教職員の資質・能力の向上
 ②ICT活用による授業改善と教職員の資質・能力の向上

【実践例2】キャリアステージに応じて求められる資質・能力の育成

③メンター研修によるミドルリーダー育成と教職員の資質・能力の向上
 ④研修内容の改善と個々のスキルアップ及びOJTによる人材育成

(2) 研究の方法

各学校の取組や管内校長会の実践、管内教育の状況等についてまとめ、校長及び校長会としての観点から分析・考察し、今後の取組や方策の参考事例とする。

3 具体的取組や実践事例

(1)「関係機関と連携した研修による資質・能力の向上」

① 管内研究所と連携した研修による教職員の資質・能力の向上

ア 実践の概要

本管内は小規模校が多いため、複数人による校務分掌運営が難しく、経験の少ない若手が一人でその任を担うことも多い。研修・研究においても同様であり、各校が単独で質の高い研修を進めることが難しい状況であった。

そこで、管内校長会が、学校とは独立した研究機関である留萌管内教育研究所（以下、研究所）と連携することで、各校の研修・研究内容の質的向上と研修の効率化を図った。

具体的には、研究所との連携強化を運営の方針に掲げるとともに、研究所に向けて、管内全体の課題とも言える教育のICT化を研究課題として取り扱うよう要請した。また、各校の実状やニーズを研究所と共有し、これに対応した運営がなされるよう働きかけた。

研究所は、より管内や各校の要請を踏まえた課題研究や研修講座を企画したほか、年5回の研修講座のすべてをオンラインによる開催とし、参加の際に大きな負担となっていた距離と時間の問題の解決を図った。

各校は、校内体制等それぞれの実状に応じ、研究所の研修講座を年間の研修計画に組み込むなど、効率的な研修の推進に努めている。

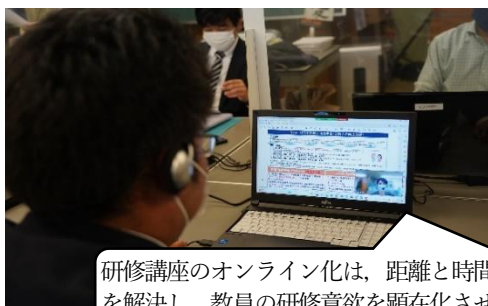
<令和4年度研修講座>

- ミドルリーダー資質向上研修
- 「特別の教科 道徳」の授業づくり
- 日常的な保健指導の実践について
- 国語科の単元デザインについて
- ICT活用したオンライン・ハイブリッド授業の進め方

イ 校長（所長）の関わり

研究所の所長職は、現職の校長が兼務することになっている。所長はこの関係性を最大限生かし、管内校長会の方針や重点を踏まえ、管内の課題解決に資する事業が展開されるよう研究所の運営に当たった。

具体的には、ミドルリーダー等の人材育成に資すること、学習指導要領の趣旨の理解と徹底（「個別最適な学び・協働的な学び」「考え、議論する道徳」等）を図ること、管内教員のニーズに応じること、ICT活用促進に資することを重視した事業計画を立案した。



研修講座のオンライン化は、距離と時間の問題を解決し、教員の研修意欲を顕在化させた。

管内の校長は、研修講座等の研究所主管事業への教職員の参加を促進するとともに、各校の課題や実状に応じて研究所の研修講座を自校の研修計画に位置付け、研修の効率化と水準の維持・向上を図っている。

ウ 成果

管内の実状を踏まえた運営と、学校や教職員のニーズに対応した研修内容により、アンケート等では、具体的かつ実践的な手立てを得たとの肯定的な評価が多く寄せられた。

また、研修講座のオンライン化により、移動の時間が必要なくなり、かつ自校にいながら受講できるようになったことで、参加者が大幅に増加した。会同形式だった令和元年度は6回の講座に145名の参加だったのに対し、令和4年度は5回の研修講座に200名余りの参加があった。これは管内の教員数の半数にあたる。

学年や学校単位での参加も増えており、研究所の研修講座を活用することで、各校が着実に研修の効率化を進めていると捉えている。

② ICT活用による授業改善と資質・能力の向上

ア 実践の概要

複式学級を擁する管内9校は、互いに協働して研修を推進するチーム体制を整え、その推進の中心となっているのが校長である。校長同士が連携してリーダーシップを発揮し、オンライン会議システムやクラウド等、ICTの効果的な活用を推進することで、授業改善と教職員の資質・能力の向上を図っている。

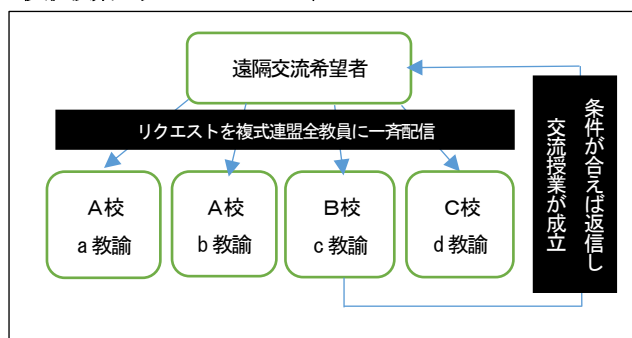
オンライン授業については、管内の複式校同士に加え、他県の小規模校とも遠隔交流授業を実施した。複式校では実施の難しい一定の集団による話し合い活動や、地理的・文化的な特徴などの相違点を生かす授業の工夫により、協働的な学びや、実感のある学びが展開されるようになってきた。

最大の利点は、小規模校では経験できない授業づくりの過程における「同学年を担当する教職員との検討・協議」が可能となったことである。一人で学習指導に取り組むことが多い小規模複式校教職員にとって、実践的かつ貴重な研修の機会となっている。

あわせて、複式校チームは、遠隔交流授業をより活性化させるため、メール連絡網サービス（交流授業マッチングシステム）を活用している。遠隔交流授業のリクエストをメールでチーム内の教員に一斉配信し、教科や時期等の条件が合えば実施が確定する。全ての教職員へ一度にリクエストが可能のため、連絡・調整が大きく効率化された。また、お互いに面識がなくても交流授業が成立する点も大きなメリットである。

また、教職員の研修についても、メール連絡網サービスを活用している。各校の校内研修の実施や動画配信の情報をメールにより配信し、興味がある場合は個人や学校単位で参加できる体制を整えた。小規模校同士の「研修のシェア」により、マンパワーの不足を解消するとともに、研修の水準の向上を図っている。

〈交流授業マッチングシステム〉



イ 校長の関わり

管内複式校9校の校長は、ICTの利活用を学校や授業改善の鍵と位置付け、「遠隔交流授業を積極的に推進していくこと」「会議等はオンラインを基本とすること」「クラウド等により教育資源をシェアしていくこと」を共通の方向性とし、各学校において認識の共有化を図った。

また、複式校チームの事務局を担う校長が中核となり、「交流授業マッチングシステム」や、クラウド上に指導案や教材等を保存し会員が自由にアクセスできる「留複情報室」を運用するなど、より強く連携できるよう環境整備を行った。



他県の小規模校との遠隔交流授業の様子。気候や生活の様子の違いに、児童は興味・関心を高めていた。教職員同士の事前協議や反省会も貴重な学びの機会となっている。

ウ 成果

ICTの効果的な活用により、多様な考えに触れたり協働して考えを深めたりすることが難しいなどの複式校の困難点を補うとともに、授業の質的改善が図られるようになってきた。

また、オンラインの活用により他校の教職員の実践に触れたり、協議したりする機会が増えたことで、多様な観点から自分の授業を振り返ることができるようになり、個々の学びが充実した。

クラウドによる指導案や教材等の共有により、授業づくりの効率化に加え、他校の教職員の実践や教材等の貴重な教育情報に触れる機会となり、自身の授業づくりに好ましい影響を与えている。

(2)「キャリアステージに応じて求められる資質・能力の育成」

③ メンター研修によるミドルリーダー育成と教職員の資質・能力の向上

ア 実践の概要

A小学校は、小規模校のよさやミドル層の機動力を校内研修の活性化に結び付けた。具体的には、ミドル層が学校の目指す方向性を理解し、これが細部にまで浸透するよう継続的な研修体制・計画を整備することで、初任者層も含めた教職員全体の資質・能力の向上を図っている。

年度当初に、教務主任が「教育目標を実現するために」というテーマで、カリキュラム・マネジメントに関する研修を行い、教育目標実現に結び付く研修の在り方を確認した。あわせて、個人の課題について事前集約を行い、日常的な授業改善や個別最適な学びを支える取組、研修機会の充実を柱とした、校内研究の体制と計画を整備した。

初任層に対しては、全教職員が行う授業研究に加え、メンター研修を並行して計画し、学級経営のノウハウ、問題行動発生時の対応、体育や図工における具体的な指導方法など、多様な学びの機会を設けている。また、事前に把握している初任段階教員の悩みや質問に対し、他の教職員がGoogle フォームを活用してアドバイスを書き込む形を取り入れた。それぞれの考えが一度に把握でき、限られた研修機会の中での話し合いが充実するなど、効率的な研修が進められている。

イ 校長の関わり

業務が個人内で完結するため、教職員同士の連携が弱くなりがちな小規模校においては、教育水準の維持・向上のために、個々の教職員を意図的に関わらせ、ノウハウや指導技術が着実に引き継がれる体制を整えることが重要である。

校長は、校内研修やメンター研修の計画立案の際、小規模校における初任層の学びの実状やミドル層の果たすべき役割について、直接ミドルリーダーへ考えや思いを伝えた。研修体制等の刷新が全教職員の資質・能力の向上に必要であることを共有し、各チーフやミドルリーダーの連携、研修内容や発信方法の工夫など、年間を通じて継続する取組の契機とした。

ウ 成果

ミドルリーダーが主体的かつ連携して、授業づくりをはじめとした多様な分野・領域にわたる研修を推進したことにより、教職員の研修意欲や学校運営への参画意識が大きく高まった。目指す子ども像や教師像へのアプローチはもとより、具体的なノウハウの伝達など、ミドル層を核にベテラン層と初任者層が融合する学びの推進により、初任層の資質・能力が着実に高まっている。

また、ミドル層の成長も顕著である。方法を工夫し効果的に成果を環流したり、意欲的に今後の目標や展望等を考え提案したりするなど、校長のビジョンを踏まえた上で、リーダーとしての意識をもち主体的に取り組む場面が増えてきた。メンターとメンティがお互いの学びの質を高め合ったことにより、組織運営が大きく活性化している。

●複式指導で、ズレのタイミングがとれないとき、どうしたらよいですか

D先生の質問に対するメンターの回答

○学年によりできることは限られますが、教員がいなくても自分たちでできることを明確にし、早い段階から行わせることが大事だと思います（友達と交流する、黒板にまとめておく、友達の考えを付け足すなどなど・・・）。

○待っている学年の児童は、「時間が余ったらこれをする」というきまりをいつも作っておく（スキルとか、漢字練習とか、タブレットで学習とか）。時間が来たら、子どもたちで司会進行をしながら、問題解決できるように鍛えるなど（私はそこまでなかなか鍛えられなかったけど、できる学級もありました）。

○先生が付けられない時「どうするか」色々なパターンを示し、経験させ仕込んでおく。子供たちによる自主学習力をつけておき、進めさせる。自走

④ 研修内容の改善と個々のスキルアップ及びOJTによる人材育成

ア 実践の概要

B小学校は、これからの教育情勢に正対し、新たな視点で学校改善、授業改善に向かおうとする教職員の意欲の高まりが感じられることから、校長として果たすべき役割を明確にし、機運を逃さずスピード感をもってチーム一丸となった教育活動を推進した。

学校改善、授業改善の推進を担うリーダー的な教職員に意識的に働きかけ、組織としての取組を活性化するとともに、個々の教職員の特性を生かした教育活動を充実させる。それにより、新しい時代に向けた人材育成、リーダー育成を図り、「自律」と「協働」を軸とした組織マネジメントの推進に結び付く。

また、教職員個々の研修を充実させるため、「研究主題に基づく校内研究」をやめ、「研修テーマを個々が追究する校内研修」へと切り替えた。分野・教科を限定せず、それぞれの教職員が、自身の研修テーマに基づいて授業を構築し、全体で交流することで、個々のスキルアップを図り、人材育成を進めている。授業の各段階における「8つのフレーム」と「板書型指導案」という研究部からの新たな提案を受け、校内での交流授業が盛んに行われており、授業改善の機運も高まっている。

イ 校長の関わり

学校全体が足並みを揃え、学校改善、授業改善に向かうためには、それらの取組をリードする職員の働きがポイントとなる。そこで、それぞれの取組におけるリーダー的な職員の立場を明確にし、推進役としての意識を高めるとともに、リーダーを中心とした組織的な取組を全職員に浸透させることで、学校改善を推進したいと考えた。

具体的には、「特別支援教育コーディネーター」の複数指名による取組内容の多様化、「学力向上コーディネーター」による学力向上に関する取組の活性化、「児童支援コーディネーター」による児童支援の充実、「ICTコーディネーター」による学校全体としてのICT活用の推進など、各コーディネーターの役割を明示することで、本人の意識向上とともに、学校全体とし

ての意識改革を図った。

また、経営ビジョンを共有し、「学校力」の向上を目指すため、より分かりやすく明確な目標として、短く、覚えやすいフレーズを学校スローガンとして掲げた。このスローガンを教職員はもとより、児童・保護者を含めた学校関係者全体が共有し、それぞれがそれぞれの立場でできることを考え、実行することで、当事者意識の高まりを目指した。このスローガンについては、校長の言葉として様々な機会を繰り返し伝え、浸透を図っている。

ウ 成果

校長が機運を逃がさず、各リーダーの果たすべき役割を明確にすることにより、推進役であるコーディネーターの自覚の向上とともに、教職員全体にもコーディネーターを中心とした自然な協力体制のもとで課題解決に当たる機運が高まってきた。自走する組織の第一歩となっていることを実感している。

学校スローガンの浸透を図ることにより、活動に明確な目的意識が見られてきた。何のために、誰のために、を意識することで確かな方向性をもった活動が展開されている。

Ⅲ まとめ

1 成果

- (1) 教職員の資質・能力を向上するために、関係機関と管内校長会が連携を図り、戦略的に取り組むことにより、ライフステージに応じた教職員の研修機会の場を提供することができた。それが、各校の研究・研修内容の質的向上と研修の効率化につながっている。
- (2) 管内複式校の校長が連携を図り、管内複式校同士、更には、道外の学校とICTを活用したオンライン授業や会議を実施することにより、教職員の授業の質的改善、研修意欲の向上につながった。
- (3) 校内研修のマネジメントに積極的に関わり、学校マネジメント力の育成を念頭に置き校内研修やメンター研修を推進することにより、学校の活性化につながっている。
- (4) ミドルリーダーに、学校全体に目を向けさせながら役割と責任を担わせることにより、使命感の高揚だけでなく、ミドルリーダー同士の主体的な連携が生まれ、自走する組織の体制づくりにつながっている。また、ミドルリーダーとしての資質向上に結び付けることができている。

2 課題

- (1) キャリアステージに応じたさらなる研修の充実を図るため、「北海道における教員育成指標」に示された内容の共有化を図るとともに、各校の実状に応じ、研修体制や研修計画に具体化していく必要がある。
- (2) これまでの留萌管内教育研究所、各研究団体における管内的研究・研修、各学校における研究・研修を生かしつつ、今年度から始まった研修制度を管内校長会が連携を図りながら、教職員の主体性を尊重した研修機会の充実を図る必要がある。

別添 2

分科会運営者研修会への研究発表者の参加について（お願い）

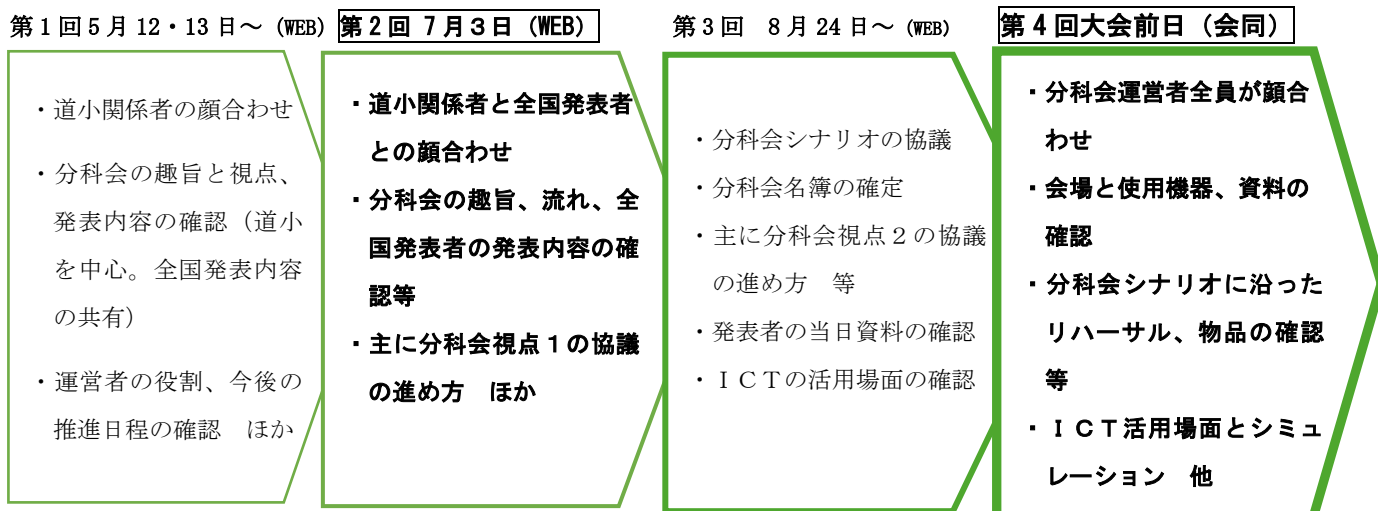
（1）趣旨

大会主題、副主題及び、北海道小学校長会における「分科会の充実こそが最大のおもてなし」の理念のもと、13 の分科会の研究課題の趣旨、及び視点 1、2 に沿った研究協議を通して校長の指導性とその在り方について明らかにする分科会になるよう、事前に当該運営者が協議等を行い、共通理解を図って分科会の運営にあたる。

（2）内容

協議の充実に資するよう、計 4 回の分科会運営者研修会を開催し、視点 1 の全国発表者には第 2 回（オンラインにて）、第 4 回（会同にて）での参加をお願いしたい。

（3）日程



（4）各分科会運営者研修会へ参加する運営者

第 1 回 研究発表者（北海道）1 名、趣旨説明者、司会者 2 名、運営責任者

第 2 回 研究発表者（**全国・北海道**）2 名、趣旨説明者、司会者 2 名、運営責任者

第 3 回 研究発表者（北海道）、趣旨説明者、司会者 2 名、運営責任者、記録者、会場責任者

第 4 回 分科会運営者全員

※ 1 全国発表者の方には第 2 回（WEB）、第 4 回（会同）の参加をお願いする。

※ 2 第 4 回は大会当日の分科会場（ホテル）が使用できないため、全体会場の札幌コンベンションセンターにてリハーサルを行う。

（5）その他

北海道大会準備委員会へ全国発表者の氏名報告が完了した時点で、北海道大会準備委員会（北海道小学校長会研修部）から全国発表者へ電話にてご挨拶並びに、発表原稿執筆に当たっての諸連絡を行う。